

# 鎮國之山

明治三十一年歲次戊戌七月吉之日肥前國

梧竹中林隆經登富士山時年七十有二書立

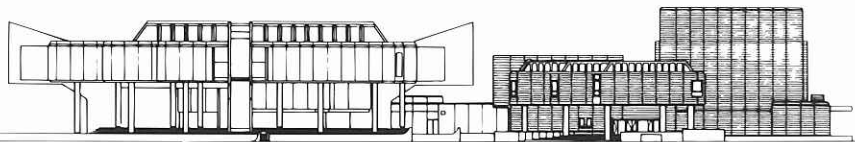
鎮國之山（中林梧竹筆）

## 佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM · SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

2 June 1997

No. 117



常設特別展案内

「墨がつくる美 中林梧竹展」

会期：6月26日～7月21日

佐賀の「梧竹さん」

6月26日(木)より7月21日(月)まで、美術館2号展示室において「墨がつくる美 中林梧竹展」を開催する。これは平成になって初めての梧竹書の展覧会であり、改めてその持てる美を紹介するものである。

さて、中林梧竹は「梧竹さん」の愛称からも窺われるように、生前は豪快、天真爛漫な性格で知られた愛すべき人物であった。現在でも多くの書家、愛好家の方が梧竹さんを慕い、またその書の閲覧を求めて美術館に来られるが、その情熱には本当に圧倒される。しかし、これは梧竹の人物、そして何よりその書作が、現在も光彩を失わぬ優れた芸術に他ならないことを示している。

梧竹書の魅力とは何であるか。これについては多くの見解があるが、やはり第一に、臨書に根ざし磨かれた優れた技量があげられるだろう。先達の書に接する時、梧竹は常にその奥にある「作意」を見つめていた。その視点と姿勢は終生かわらず、梧竹の書芸術を支える大きな根幹となっている。

本質を捉え、独自の表現を確立した芸術作品は、時代を経た後も新鮮であり続ける。梧竹の書はそうした芸術の価値観を変わらず今に伝えている。

展覧会出品作から

ここで本展出品作より4点について紹介してみたい。

1. 「鎮国<sup>ちんこく</sup>之山」 ※表紙写真

清国への遊学から帰国後の明治31年(1898)7月、梧竹は富士山頂の浅間神社境内に銅碑を建立した。これはその銅碑の拓本である。また、銅碑を運搬、設置した際の写真も残っている。72歳の作である。

2. 「海外<sup>かいがい</sup>飛香」対幅

落款に「星巖公語」とあるが、星巖とは小城鍋島藩二代藩主直能公の号である。直能は現在の小

城郡「桜園」を命名したことで、天皇の御製を賜ったが、公卿・儒臣らもこれに和し、「海外飛香」と題される一冊の帖にまとめられることになった。

82歳の作品で、その書技が最も円熟した時期にあたるといえる。

3. 「桐園」四曲一隻

梧竹作品は書のみならず水墨画も多数存在するが、この「桐園図」は中でも一際面白い一作である。

第二扇、太い幹のあいだにくっきりと小さな「足跡」がある。これはおそらく梧竹本人のもので、描きながら何かの拍子に本紙を踏み付けてしまったのだろう。全身を使い喜々として制作に打ち込んだ梧竹のすがたが目に浮かぶようだ。

それにしても、太く奔放に引かれた線、墨の濃淡による空間表現など、観る者を圧倒する迫力に満ちた作品である。

4. 「虹園」四曲一隻

上記にて紹介した「桐園」は、梧竹が明治39年と41年の二度の佐賀、相知町滞在の際に制作したものであるが、この他にも一連の作と思われるものが存在している。

「虹園」はその中のひとつで、寸法から元々襖絵として制作されたであろうことが窺われる。

画題に桐、竹を多く用いた梧竹だが、虹を描いた作品は他に類がなく、極めて珍しい例といえるだろう。

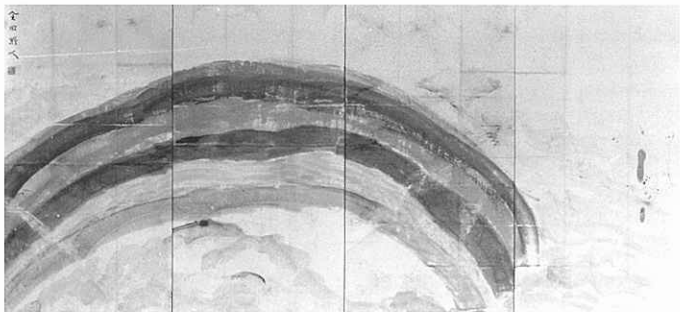
今回の展覧会では、主に梧竹の扁額など少字数作品、そして水墨画を主体とし、館藏品および県内外の優品を集めて展示する予定である。

日常、あまり書に触れる機会が無い方にもぜひ鑑賞していただきたい展覧会であり、梧竹作品の魅力を堪能していただきたいと考えている。

(学芸員 野中耕介)



3.



4.

## 常設展案内

## 博物館・美術館新収蔵品展から

会期：4月25日～5月25日

佐賀県立博物館・佐賀県立美術館では日頃から自然史・考古・歴史・美術・工芸・民俗の各分野において、日頃から資料の調査、研究、収集、公開に努めている。

この企画は、そうした成果として、平成8年度に当館が購入・寄贈・寄託等によって収集した新収蔵品を一堂に展示・紹介するもので、博物館・美術館資料の最新状況を知っていただく絶好の機会であった。

今回は、自然史5件、考古11件、歴史7件、民俗2件、絵画19件、書10件、彫刻1件、工芸2件、写真1件、デザイン1件とたいへんヴァリエーションに富んだ内容であった。

以下、展示した59件(250点)の資料のなかから数点を紹介する。

本展の開催にあたり、作品および資料を御譲渡ならびに御寄託いただきました皆様にご心よりお礼申し上げます。



石鈎(複製) 古墳時代

購入

この資料は、浜玉町谷口字立中にある谷口古墳(前方後円墳)の、東石室内の長持形石棺から出土した。原資料は東京国立博物館が所蔵している。

石鈎は、古墳時代の石製腕輪の一種で、宝器的な性格を持ち、碧玉で造られている。この古墳からは、合計11個の石鈎が出土しているが、鏡・勾玉・鉄剣・鉄斧などが出土しており、4世紀末頃造られた玄界灘沿岸の代表的な古墳である。



盲僧琵琶(荒神琵琶) 昭和時代

寄贈

盲僧琵琶を奏する盲僧は全て天台宗に属し、九州にのみ存在している。その中で九州北部(福岡県、大分県、佐賀県等)に居住する者を筑前盲僧と称し、成就院(福岡市西高宮)を本山としている。本器の所有者であった故・光國清順氏(明治40年小城生れ、昭和56年没)も筑前盲僧の一人で、小城町内の檀家(農家)を中心に、琵琶を伴奏にお経を唱えながら荒神御い(寛ばらい)をして廻った。謝礼はお金、もしくは、お供えのお米であった。

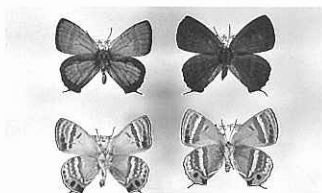


肥前国風土記 江戸時代後期

寄贈

『肥前国風土記』は古代の肥前(いまの佐賀・長崎県域)の状況を知るための最も基礎的な資料である。原本は奈良時代に成立したが現存しておらず、写本や版本として伝わっている。写真の資料は江戸時代後期に刊行された木版本である。

本文には、肥前国内の各部について郷数や里数、歴史や特産物などが記されている。また「佐嘉郡」の項には、佐嘉(佐賀)の地名が樟の巨木が咲える国から起こったとする伝承を載せている。



鳥栖市九千部山産のフジモドリシジミ標本  
坂井文雄氏寄贈

富士山で最初に発見されたことからフジモドリシジミと名付けられたチョウ。日本固有種(日本だけに分布する種)で、北海道の渡島半島から九州まで分布し、幼虫は冷温帯に生育するブナの葉を食べて成長する。このため佐賀県では鳥栖市の九千部山から石谷山の尾根筋に見られるブナ林が唯一の生息地として知られている。この生息地は日本最西端にあたる大変貴重なものであるが、自然林の伐採が生息環境を悪化させている。



八幡字打出二枚胴具足 宮田勝貞 宝永5年(1708) 購入

宮田家は佐賀藩お抱えの甲冑師で初代藩主鍋島勝茂に召抱えられ、現在の佐賀市伊勢町に住んでいた。熱した鉄板を裏面からたたき、竜などの文様を打出す技法を得意としていて、一般に肥前具足と呼ばれている。勝貞は宮田家の五代目にあたり、歴代随一の名工とされている。

この具足は、勝貞が得意とした打出しの技法で八幡の文字を表現していて、肥前具足の特徴がよくあらわれている。



天井画(下絵) 岡田三郎助 明治39年(1906) 購入

岡田の年譜によれば、1906年(明治39年)、東宮御所造営にあたり、第三客室の窓上飾りとして楕円形の草花図8点の下図に着手したとあり、本資料はこの内の1点にあたると思われる。東宮御所とは、現在の迎賓館赤坂離宮で、1908年に現在見る姿になった。

岡田(1869~1939)は白馬会会員、東京美術学校西洋画科教授、帝国美術院会員、帝室技芸員として明治、大正、昭和の3代にわたり活躍した。



しゃかくくやうじ  
釈迦苦行図  
おわきえいてつ  
大木英鉄  
寛文3年(1663)

購入

大木英鉄(1638~1668)は神埼郡東脊振村に生まれた。仏門に入り、領内十郡の神社・仏閣の由緒米歴を尋ねて「肥前州古述縁起」を著すなど、佐賀県の文化史において大きな足跡を残した。また画家としても名高く、狩野益信に画技を学んだといわれ、仏画を得意とした。この「釈迦苦行図」は、鮮やかな色彩が今も残る優品である。

## 常設特別展案内

## 自然史分野「化石が語る新生代第三紀の佐賀」

会期：8月14日～9月15日

佐賀県から恐竜の化石は見つかるの？、とよく聞かれることがある。残念ながら、見つかりません(福岡県や熊本県からは見つかるのに!)、と答えると、がっかりされた表情をされる。

確かに佐賀県からは、数年前から注目を浴びている恐竜の化石は産出しない。中生代の堆積層がないからである。しかし、世界最大級のオウムガイ化石やコウテイペンギンよりも大きかった鳥ペンギンモドキなど、その種類や産出数の上で、佐賀県に特徴的な生物の化石も少なくないのである。

佐賀県で産出する化石は新生代と呼ばれる時代の堆積層から見つかるものである。新生代は古第三紀(6500万～2400万年前)、新第三紀(2400万～170万年前)、第四紀(170万年前～現在)に区分されている。

このうち佐賀県の地史を語るうえで、最もバラエティーに富む重要な時代は古第三紀である。この時代に形成された堆積層の分布範囲は、県北西部の藤木・相知・北波多から南部の有田・嬉野・太良町に及ぶ。このことは、当時の範囲に堆積作用が盛んな浅い内海が広がっていたことを意味し、そこから見つかる化石は、当時の佐賀県の環境やそこに生きていた様々な生物の姿を如実に物語ってくれる。

今回の常設特別展は、佐賀県の地下に眠っていた古生物学的資料にスポットをあて、それをもとに当時の佐賀県の様子について考察したいと考えている。展示構成と主な内容は次のとおりである。

## 1.石炭の時代

佐賀県における古生物学的記録は、約4000万年前から残されている。この時代は、古第三紀の中で始新世と呼ばれ、当時の海岸線はJ R唐津線付近と推定されている。この時代には相知層群が堆積し、最も古い化石は浅海性の貝類を主体としたものであるが、次第に汽水や淡水性の環境へと変化し、そこに石炭のもとになる大量

の植物の遺骸が堆積していった。

1つの炭層の厚さは1m前後で、これが堆積層の中に十数層積み重ねられている。佐賀県の炭田は唐津炭田と呼ばれ、九州では最大の炭田形成面積を有する。これだけの量の石炭が形成されたことから、後背地には植物が繁茂していたに違いない。石炭と一緒に発見された植物の化石や動物の化石などから、当時の気候は植物の生育に適した亜熱帯的な気候であったと考えられており(サバリテスと呼ばれるヤシの一種の化石も見つかっている)、陸には大森林があつたのではないだろうか。

このコーナーでは、これらのことを裏付ける化石を展示解説する。また、展示する化石は採炭の際に見つかったものが多い。佐賀県には戦後の最盛期(1957年)には65カ所の炭鉱があり、採炭に用いた道具も関連資料として展示する予定である。

## 2.海の時代

石炭の時代が続いた始新世の末に、堆積盆地の隆起があつたが、その後再び沈降し浅い海となった。海の時代の幕開けである。

この時代は漸新世(約3500万～2400万年前頃)と呼ばれ、杵島層群を堆積した。この地層からは極めて豊富な海産生物の化石が見つかり、主なものとしてウニ、カニ、サメ、カメ、オウムガイなどがある。当時の海は今と違い、ゴミ一つない豊かな生物たちの楽園だったに違いない。このうち佐賀県を代表する化石として、オウムガイ類とペンギンモドキ類に重点を置いた展示を計画している。

## (1) オウムガイ類

オウムガイ類は、約5億年前からその形態をほとんど変えることなく生き続けている「生きている化石」として知られている。現生種はフィリピン付近やインド洋の亜深海にのみ生息しているが、絶滅したオウムガイ類の中には、現生種をはるかにしのぐ大型の種類も存在していた。

日本における古第三紀のオウムガイ化石は、九州と北海道で発見されているが、大部分は九州北部で占められている。このうち佐賀県から発見されたオウムガイ化石は極めて良好な保存状態で、さらに最大直径が70cm（完全個体として復元した場合）と世界最大級のものもある。オウムガイ化石は、これまでに県内の10カ所以上で40個体以上が発見されており、佐賀県を代表する化石と言っても過言ではない。

ほぼ完全なものとしては日本最大のオウムガイ化石（直径42cm）が、現在、佐賀県立博物館の常設展示で公開されているが、今回の常設特別展では、欠損があるもののさらに大きなオウムガイ化石を展示する予定である。

ところで、日本で発見されるオウムガイ化石は、南洋の生息海域より死骸が潮流で運ばれてきたものとされている。しかし、その良好な保存状態、高い産出密度から、当時の佐賀県付近が生息海域であった可能性も否定できない。

## (2) ペンギンモドキ

ペンギンモドキはプロトブテルム類とも呼ばれ、今では見ることのできない生物である。ペリカン目に近い鳥とされ、現在のペンギンやウミガラスのように翼を使って泳いでいたと考えられている。化石の大きさから、この仲間には数種類いたらしく、最も大型のものでは体長が2

mほどあったらしい。

ペンギンモドキの化石は、太平洋の東側ではわずか2例しか発見されていないが、日本では多くの科のペンギンモドキの化石が多数発見されており、その発祥の地は日本であったと考えられている。日本では九州北部に集中して化石が発見され、佐賀県は福岡県に次ぐ産出数があり、その産出地点数は全国一で10カ所近くある。

これらのほか、貝類、サメの歯、サンゴ類の化石などを展示する予定である。数千万年前の生き物たちの痕跡をおとして、豊かだった当時の海の様子を思い描いてみるのも、楽しいのではないだろうか。

また、佐賀県から産出しないう中生代の生物の三葉虫、中生代の生物の恐竜等の化石の展示コーナーも設け、地球の歴史についてもふれたいと考えている。特に恐竜は子供たちに人気があるので、直接化石に手を触れられるような展示ができればと考えている。

なお、佐賀県では「生きている化石」の代表的な生物であるカプトガニやシャミセンガイ類など珍しい生物が知られている。そこで、代表的な「生きている化石」を取り上げ、現生種と化石種を対比させて展示し、生物進化の不思議についてもふれさせたい。

(学芸員 中原正登)



ヨコヤマオウムガイ

5 6 7 8 9  
5cm 6cm 7cm 8cm 9cm  
Tojima JAPAN



カグラザメの歯



ペンギンモドキの中足骨



論足貝の一種

写真提供および化石所蔵：青木隆弘氏

## 行事案内

4月⇒6月

日月火水木金土  
1 2 3 4 5  
6 7 8 9 10 11 12  
13 14 15 16 17 18 19  
20 21 22 23 24 25 26  
27 28 29 30

日月火水木金土  
1 2 ③  
④ ⑤ ⑥ 7 8 9 10  
11 12 13 14 15 16 17  
18 19 20 21 22 23 24  
25 26 27 28 29 30 31

日月火水木金土  
1 2 3 4 5 6 7  
8 9 10 11 12 13 14  
15 16 17 18 19 20 21  
22 23 24 25 26 27 28  
29 30

カレンダー内は、□印は休館日

常設展		美術展		観覧会	
観覧料大人210(150) 大学150(100) 高校生以下は無料、( )内20名以上団体				枠内に明記する以外は無料	
博物館		美術館		4号展	
1号展・2号展・3号展・大展 テーマ展		1号A・B展 2号展 3号展		4号展	
常設展 佐賀県の歴史と文化	4/1	4/4 銅島織通 I 彫刻	愛とロマンの旅人 竹久夢二展		～4/13(日) (有料) 佐賀新聞社
	4/13	4/13	展示替え・資料整理のため休館		
	4/22	4/22	4/25	中国ミイラ展	4/26(土)～5/18(日) 大人・大学生1000(800) 中学生800(600) 小学生600(400) ※( )内は前売り・団体料金 佐賀新聞社
	6/1	6/1	5/25	展示替え・資料整理のため休館	
	6/6	6/6	第5回 梧竹・蒼海彫影 佐賀県書道展		前期5/3(金)～6/1(日) 佐賀後期6/4(水)～6/6(金) 新聞社
	6/6	銅島織通 II	第80回 佐賀美術協会展		6/12(木)～6/22(日) 佐賀美術協会
	6/26	(常設特別展) 書がつくる美 —中林梧竹の書—	AIS展V1997		6/24(火)～6/29(月) グループSUS

## 人事異動

4月1日付人事異動で下記のとおり職員の異動がありました。

## 転入

館長 山田 陸三  
(九州陶磁文化館館長より)

副館長 木下 巧  
(文化財課参事より)

総務課長 山口 和良  
(競馬事務局総務課長より)

庶務管理係長 毛利 明彦  
(世界森博事務局企画調整主査より平成9年1月1日付)

主事 野中 淳司  
(佐賀土木事務所用地第二課主事より)

技術員 高柳 雅之  
(神埼土木事務所総務課技術員より)

## 転出

館長 深川 弘一  
(水産局局長へ)

副館長 森 醇一朗  
(名護屋城博物館副館長兼学芸課長へ)

総務課長 大園 進  
(県立図書館普及課長へ)

専門員 一丸 正美  
(退職)

技術員 近藤 誠性  
(退職)

主事 石橋 邦広  
(神埼中学校主事へ)

佐賀県立博物館・美術館報 第117号 平成9年6月2日  
編集発行 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館  
〒840 佐賀市城内1-15-23 TEL0952・24・3947 FAX0952・25・7006  
印刷 日之出印刷株式会社